学生商店街住みコミ

震災前のにぎわい 僕ら流で

「下町風情」ひかれた10人

神戸・稲荷市場

阪神大震災前のにぎわいを取り戻そうと、神戸芸術工科大(神戸市西区)の学生グループが、神戸市兵庫区東出町の商店街「稲荷市場」の空き店舗に〈集団移住〉する「住みコミュニケーションプロジェクト」を進めている。居住環境づくりを楽しみながら、住民らとイベントなどを企画し、商店街の空洞化を食い止めたいという。今月から一人目の学生が生活を始め、来夏までに、さらに九人が順次、引っ越す予定。商店主らは「若い力で活気を呼び込んで」と期待している。

最盛期の一九七〇年代、約九十店が並んだ商店街は、震災、不況、経営者の高齢化などで今や三分の一の約三十店に。震災で倒壊した建物を再建できず、空き地のままの店舗跡も多い。

四年前、姉が企画した商店街のイベントに参加し、〈下町風情〉にひかれた同大院生の三宗匠さん(23)が、計画を卒業論文で提案。仲間を集め、空き店舗の家主との仲介を持ちかけると商店会側は快諾。計画に賛同した民間企業から、イベントや建物改修に充てる150万円の助成も受け、大学周辺のマンションなどで一人で暮らす学生が、商店街の空き店舗に移る。

改修した元韓国料理店に今月から住む同大院生の与那嶺ゆずさん(22)は「街の雰囲気が大好き。役に立ちたい」と話す。一階は定期的に住民対象の催しを開いたり、企画を練ったりする事務所にあて、二階で生活し、地域に溶け込んだ活動を目指す。

三宗さんは「安価で、創意工夫の生かせる住居で地域に役立てば双方にプラス。後輩たちにも引き継ぎ、息の長い取り組みにしたい」、稲荷市場南栄会会長の大畑守人さん(64)は「震災、不況と悪循環が続くなか、若い力を借りて、かつての元気を取り戻したい」と話している。

住み込み先の空き店舗で、今後の催しの計画などを練る神戸芸術工科大の学生たち（神戸市兵庫区の稲荷市場で）